

「哲学の終焉」と作ることへの問い

伊藤 徹

「哲学の終焉」という言葉は、それが発せられた 1964 年当時とは異なり、もはやほとんどセンセーショナルな響きを失っているように思われる。だがそのことは、ハイデガーにいわせれば、「終焉」の常態化にほかならず、「最後の可能性」から「最初の可能性」へと架橋する場所というその性格は、ますます隠されてきているということになるにちがいない。状況の進行は、ハイデガーが残した言説を真剣に受け取めるとともに、この世界における人間のあり方への反省のまなざしを、私たち自身が改めて向け直すことを要求している。

そのようなまなざしが向かうべき、少なくとも一つの方向を、私は作るという人間の営みにとりたいと考えている。作ること=ポイエーシスは、いうまでもなくテオーリア、プラクシスと並ぶ、人間存在の根本可能性の一つとして古来意識されてきたことであるが、西洋の哲学の歴史は、主として後二者に考察の力点を置いてきたとあってよい。しかしながらハイデガーは早くから、ポイエーシスがこの歴史のなかでひそかに演じてきた役割の重要性に気づいていたのであり、そのことは存在理解がポイエーシスの地平でなされてきたというテーゼに表現されている。こうした指摘は、「哲学の終焉」を巡る晩年の言説にも引き継がれているだけでなく、彼がこの「終焉」を見たのは、科学技術および産業という作ることの先鋭化によって造形された世界においてであった。いわく「哲学の終焉は、科学的技術的世界とこの世界にふさわしい社会秩序を統御し整理することとして現れる」。

ハイデガーのいう技術の本質としての「組立(Gestell)」は、文字通り「立てること(Stellen)」の集合態である。技術化された世界のなかで、あらゆる存在者は、人間によって「用立て(bestellen)」られた「用象(Bestand)」として、有用性の連関の内にまさしく「位置(Stelle)」づけられたものである。だがこのような有用性としての「位置」は、当の存在者固有の「場所」ではないのであって、有用なもの、すなわち手段である限り、己れとは別なものに目的をもち、そこへと引き出されることによって、その存在を養っている。けれども、目的として誘引するこの「別なもの」もまた、あらゆるものを「用立て」ていく世界のなかでは、やはりまた「用象」としてさらに別なものへと委ね渡されていく。「用立て」によって徴発され続けていくこうした関係は、技術の主体とみなされてきた人間に役立つことの最終的な目的地を見出すはずなのだが、技術の本質的な普遍化の動向は、人間すらも「用立て」られたものとして現出させざるをえない。人間の存在もまた有用性の連関の一つの「位置」にすぎず、『存在と時間』の場合のように帰趨連関としての世界を *letztes Umwillen* としてつなぎとめることはもはやないのであって、技術の本質としての「組立」は、帰趨していく中心を欠いて綿々と続く「位置」の連鎖としても、ゲ・シュテルと呼ぶことができよう。この連鎖のなかに現出する存在者は、たしかに有用なものとしての相貌を帯びている。だが、この有用性としての「位置」の連鎖に、最終的に行き着く「目的」がないことを思うならば、実のところ、あらゆる存在者は無用性を帯びたものといわねばならない。

つまりあらゆるものを有用化へと駆り立てていく技術的世界は、その有用性の裏側に根本的な空洞を抱え込んでおり、そこに浮かび上がっているのは、実は手段でも目的でもない、或る種不気味な存在者たちだといえよう。いうまでもなくこの空洞は、不具合といった意味での有用性の欠損を意味するものではなく、用の成り立ちの根底にあるもの、目的・手段の表象によっては隠されてしまうとハイデガーもいった技術的世界の無底の裂目にほかならない。

形而上学が、或る存在者を存在神論的に、すなわち「もっとも高くかつもっとも普遍的」なものとして指定することだとするならば、このような技術的世界においては、もはやどんな存在者であれ、そうした付託に応えることはできない。人間も含めてあらゆる存在者に与えられた「位置」は、いずれも空洞化してしまっているからだ。そういう意味では、たしかに形而上学としての哲学は、技術的世界において終焉したのである。

ならばこの「終焉」のあとに残されたものは、なにか。それは浮動する有用性としての「位置」の連鎖がそこに浮かび上がっている無底の「場所」以外にはあるまい。「終焉」のあとの思索の課題がもしもあるとすれば、それはどこかよその土地から移植されうるものではなく、この「場所」のうちに捜し求めるほかあるまい。「方域」は、たしかに技術化された「終焉の場所」とは別なところに思い描かれたユートピアのようにも見える。だが「方域」としての世界は、「組立」と別にはないのであって、それを牧歌的なイメージのものとして見ることは、いってみれば再度「組立」の奥底の「場所」を「位置」の連鎖が浮かぶ表層に引き上げてしまうことにほかならず、終焉した形而上学を続行することでしかないであろう。むしろこの「場所」を無底のままに受け取ることこそ、ハイデガーの「観入」が目指したことであり、そうして測深された「場所」がそのまま「救うもの」ではなかったのか。「方域」とは、有用性の奥底に覗き込まれた暗闇ではあるまいか。

だが、有用性とは無縁なこの「場所」は、どんなかたちで「救うもの」となりうるのか。技術の本質が組立であり、組立の本質が危険であって、「危険が危険としてあるとき、危険はそれ自身、救うものである」という彼の言葉にしたがうならば、「守り(Wahrnis)」と呼ばれた「救うもの」もまた、作ることと別にはありえないだろう。それは、ハイデガーが *bauen* という言葉に託しもした、作ることの一つの可能性として、死すべき人間に到来するしかないのではなからうか。私自身は、そのような可能性を、「用象」となった存在者が他の存在者ともつれ合って織り成す有用性の連鎖の内を動きながらも、その奥底の「場所」への通路を開くふるまいとしてイメージしている。ハイデガーは、技術と同じ来歴をもつ芸術にそうした可能性を求めたが、「場所」を開くはずの芸術がまたその歴史のなかで、形而上学の運命の元にあつたこと、ここの言葉で言い換えれば、「位置」のつながりのなかに「場所」を解消してしまってきたことも彼は十分知っていた。したがってテクノロジーの単なるアルタナティーヴェとして芸術を置き、そこに救いを求めることは、「方域」のユートピア化と同じ轍を踏むことになる可能性は高い。芸術もまた、「場所」への遡行の途上にあるものとして私たち自身の目と思索によって吟味されることなしには、次から次へと駆り立てられていく有用性の連鎖をいわば下方へと突き破ったところでものがものとして現成する開けへの通路は開かれないであろう。そうした吟味はハイデガー自身がもっていた芸術イメージから離れていくこともけっして排除しないと、私は考えている。